

髪も人生も自分らしく創る

阪神大震災で理事長の父を亡くし、32歳で理美容学校の理事長を継ぐことになった。自宅も学校も被害を受けて大変だったが、「街全体に、皆んなで助け合って立ち直ろうというエネルギーが満ちていたから、乗り切れたのかもしれない」と半田さん。持って生まれたスピード感に加えて、超プラス思考の持ち主。「どうせ、やるなら変えてやろう」と、その時思った。

まず、スクールコンセプトを変えた。理容師・美容師の国家資格を得るための学校にとどまらず、「理容師・美容師という仕事はもっとアーティストックでなければ」「学生たちがヘアという舞台上で自分の人生を自ら創ることがARTなのではないか」そんな思いから、学校名に、HAIRとARTを組み合わせた「ヘアラルト」と新たに加えた。自分の人生を自分自身で創って自立できるよう2年間で学んでほしいという願いを込めている。半田さんは担当の講義「発想論」を受け持って、高校を卒業したばかりの学生たちと触れ合うとき、「ひとりで行動することが大事」と日常生活からアドバイスをする。「ひとりで映画見に行ってきたよ」という学生の小さな

ステップにも「良かったね！」と一緒に喜ぶ。若い世代も惹きつける、そのポジティブな考え生き方は、「丸刈り奮戦中」「私らしくしあわせになる方法」などのエッセイ本にもなっている。ここで、半田まゆみ流・夢を叶える3つのステップ

- 1、信頼できる人に自分がしたいと思っていることを口に出して語る
- 2、チャンスをもたらしたら怖気づかずに挑む
- 3、チャンスくれた人に感謝する

「この3つができれば、どんどんチャンスが広がっていきますよ。「どうせ無理」とか「私なんて」と考える必要はない。せっかくの夢やチャンスをできなくしているのは自分だということに気づいてほしい」大学非常勤講師もこなし、「人間はなぜ髪を切るのか」を永遠のテーマに「ヘアメディア論」を展開。また髪をアートとして捉え、アーティスト活動などマルチな才能も発揮している。師と仰ぐ現代芸術家嶋本昭三氏らをはじめ、各国の展覧会で様々なアーティストとの活動に意欲的に取り組んで注目されている。髪の毛は日本においても古来より神聖なもの。生命力のシンボルである。ネイティブアメリカンにおいてもしかり。その髪を切ることは悲しみや、抗議などを意味する。世界的に有名なデニスバンクス氏と出会い、髪に対するスピリチュアルな信念に共感。カナダでの「ランニングプロジェクト」でネイティブアメリカンの文化、自由に捧げるという行為が剃髪だった。当時日本では周囲から大反対があったという。この髪型は半田さんの生き方そのもの。どこにいても、どこから見ても実にチャーミングでかっこいい。なんのくすみもない笑顔と、未来を見据えるクリアな瞳。これからも多彩な活躍が楽しみだ。 <http://www.handa-mayumi.jp/>

